



# 南極観測隊経験者に インタビュー



31次・41次・49次・55次越冬、44次夏

うしお しゅうき  
牛尾収輝さん

国立極地研究所 気水圏研究グループ准教授

(2016年7月現在)



## 南極では、どんな研究やお仕事をしたのですか？

南極大陸の周りに広がる海氷と海洋を調べています。観測船上からセンサやカメラで氷の厚さを測ったり、温度・塩分・流れを長期連続記録するための測器を海水中に沈めたりしています。昭和基地近くの厚い氷の上では、ドリルを使って海氷試料も採ります。大勢の研究者が広い南極海に出かけて、くまなく調べることは難しいので、観測船や基地付近で得られたデータを人工衛星による観測情報と照らし合わせることによって、南極海全体でどのような変化が起こっているかを解き明かしていきます。海や氷が南極の自然の中でどのような役割を果たしているか、地球環境変化の将来を予測するための手がかりを追い求めています。



背丈を超える厚い海氷。氷の孔開けに5人がかりで3時間以上かかった。くたくたになって食べた昼ご飯のラーメンがたまらなく美味しかった。(1990年、31次隊)



## 初めて南極におり立ったときの感想をおしえてください。

昭和基地に向かう観測船の甲板に立つと、白く凍った海が果てしなく広がっていました。見たこともなかった厚い氷や、氷同士が積み重なって丘のように盛り上がった姿に、自然が生み出した美しさと力強さを実感しました。深い海から汲み上げた水の冷たさ、氷の孔を掘る時の手応えからも、極地の厳しさを存分に味わいました。



## 一番印象に残ったこと・一番楽しかったことはなんですか？

真冬の8月、飛行機から海を観測した時、水面から湯気がモクモク立ち昇りながら(氷煙という)、今まさに海が凍る瞬間を観察できました。実験室でしか見られなかった現象を生で見、貴重な観測データも取ることができ、うれしかった。一人ではできない観測や昭和基地の作業を皆で協力して取り組む日々を、大自然の下で過ごせることも南極越冬の魅力です。地球は不思議に溢れています。その場所へ出かけていかなければ気付かない現象も、現地観測がきっかけとなって謎解きのヒントが得られ、研究が進みます。寒さと強風で辛い観測もありますが、その辛さも楽しんでしまうゆとりを持って、ワクワクしながら研究に取り組んでいきたい。